

スポーツは文化。 世界の輪を広げたい。

フィギュアスケート選手 **宮原知子さん**

みやはら・さとこ 1998年京都市生まれ。関西大学在学、木下グループ嘱託。5歳でフィギュアスケートを始め、2011、12年の全日本ジュニア選手権で連続優勝。全日本選手権4連覇(2014-17)、世界選手権銀メダル(2015)、銅メダル(2018)や四大陸選手権優勝(2016)など国内外で活躍。17年に左股関節疲労骨折という大けがを負うも、リハビリを経て復帰。18年の平昌冬季五輪で個人4位、団体5位入賞を果たす。京都府スポーツ賞特別栄誉賞と京都市スポーツ最高栄誉賞を2度受賞(2015、18年)。

「ミス・パーフェクト」を育てた京の街

幼い頃から、とにかく練習の虫。ひたむきな努力をこつこつと積み重ねてきた宮原さんに付いた異名が「ミス・パーフェクト」です。異名のおり、失敗の少ない安定した演技を武器に2014年から全日本選手権を4連覇し、2018年に念願の平昌冬季五輪に出場。日本人トップの4位入賞を果たしました。

2018-19年シーズンもグランプリシリーズなどの国際大会に出場し、トップフィギュアスケーターとして世界を転戦する宮原さん。そんな彼女は京都の街で生まれ育ちました。「小学校の低学年のときは地元の公立小学校に通っていて、近所の児童館に通ったこともよく覚えています」。

今があるのは京都での出会いのおかげ

宮原さんは京都市の出身ですが、スケートと出会った場所はアメリカ合衆国。医師である両親の都合で幼少の一時期をテキサス州ヒューストンで過ごし、その時にフィギュアスケートを始めたそうです。小学生の時に京都へ戻り、伏見区醍醐にあったスケートリンク(現在は閉館)に通います。同じく京都市出身の太田由希奈さんをはじめ数多くのフィギュアスケーターを育てている名門スケート教室・京都醍醐FSCの拠点だったリンクです。「スケートを本格的に習い始めたのが醍醐のアイスリンクでした。そこで今の先生(濱田美栄コーチ)たちに出会えたおかげで、ここまで来ることができました」。

醍醐リンクの閉館後は、冬場は西京極の京都アクアリーナ、夏場は兵庫県の柏原や姫路まで通って練習を重ねたそうです。

実家に戻れば近所を散歩

幼少期をアメリカで過ごし、ジュニア時代から国際大会などで海外へ行く機会が多い宮原さんにとって、京都は「街中にたくさんの文化遺産があり、情緒にあふれた街だなと思います」。海外の選手たちに

とって日本の文化は興味深いようで、彼女らと交流する中で、「日本で開催される試合やアイスショーにはぜひ出場(出演)したい!という声もよく聞きます」と宮原さん。

また、彼女にとって京都はふるさと。やはり、帰ってくると「ホッとする」場所だそうです。シーズンを終えて実家に戻ってきたときは、「近所を散歩することが好きで、ぶらぶら歩きながらかわいいカフェやショップを探したりしています。まだ行ったことのない歴史や文化スポットもたくさんあるので、ぜひめぐってみたいと思っています」。今はフィギュアスケートの選手として世界のさまざまな都市を訪れる宮原さん。子どもの頃とはまた違った京都に出会えるのでは。

スポーツは世界の輪を広げる文化

そして、いよいよ来年に迫った東京オリンピック・パラリンピック。冬季五輪ではないため宮原さんは選手としての出場はありませんが、同じ五輪アスリートとして大注目しています。「自国での開催なので、その熱気を間近に感じられるのがとても楽しみです。出場するすべての選手たちを応援したいと思います」。

さらに、文化都市・京都で生まれ育った宮原さんはオリンピック・パラリンピックの意義について、こう続けます。「スポーツは文化であり、国同士の交流を深めるものだと考えています。選手同士の交流が国同士の交流へとつながり、やがて世界の輪を広げることができるのではないかと感じています」。

自分らしいスケートをもっと磨きたい

いつも全身全霊でリンクに向かう姿が印象的な宮原さん。そのひたむきな眼差しが見つめる理想はまだまだ先にあります。「今、ジャンプの改革に取り組んでいます。これを確かなものにして、自分らしいスケートをもっと磨きながら、目標に向かってこれからも突っ走っていきます。そして、息抜きには京都の街を散歩しながら心を休めたいと思います」。

今後のますますのご活躍に期待しています。

